

奈良市アートプロジェクト「古都祝奈良 2019-2020」美術部門

企画書

2019 年 5 月 3 日

西尾美也

1. 作家プロフィール

北澤 潤 きたざわ・じゅん



美術家。1988 年東京生まれ、ジョグジャカルタ拠点。

東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程修了。合同会社北澤潤八雲事務所代表。さまざまな国や地域でのフィールドワークを通して「ありえるはずの社会」の姿を構想し、多様な人びととの立場を越えた協働によるその現実化のプロセスを芸術実践として試みる。2013 年より IPA-Institute for Public Art 研究員(上海)、2016 年に米経済誌フォーブス「30 Under 30 Asia」アート部門選出。2016 年から 2017 年にかけて国際交流基金アジアセンター・フェロー（インドネシア）。

2. 作家選定理由と、現時点の企画内容

北澤潤氏は、「日常」をあえて揺さぶる「問い」を投げかける仕事をしてきました。病院や港町、児童館、商店街、家庭、学校、仮設住宅、団地……、あらゆる地域や施設、制度に対してアートプロジェクトを提案し、そこで過ごす人びとと一緒に実現し続けてきました。関わる人びとは素朴な創造行為をたくさん生み出し、リアクションしてくれると言います。北澤氏は、そうした「創造するコミュニティ」を地域の中で育み、大切にしていくことをアートプロジェクトを通じて提案しています。この視点は、奈良市アートプロジェクトがこれまで「生活」に着目して展開してきた流れと共鳴しています。チェ・ジョンファ氏が「素材」と「生活の再発見」を、小山田徹氏が「学び合うこと」を市民に求めていたとすれば、北澤氏のプロジェクトは、「創造する主体」として市民を巻き込んでいく、次なるステップとなるでしょう。

また、北澤氏は、こうした自らのアートプロジェクトのお手本として、日本に古くから存在している小さなお祭りや年々歳々繰り返されてきた文化行事を挙げています。多くの地域で今ではほとんどみることができなくなってしまった「失われた伝統行事」に対して、北澤氏はアートプロジェクトを用いた「芸術の復興」をコンセプトとして打ち出しています。

奈良はその意味で、北澤氏にとって新しい試みになるでしょう。古くからの伝統行事が今もあちこちに残っているからです。一方で、多くの普通に暮らす奈良市民は、そういった行事や観光地とはあまり接点なく生活しているという側面もあります。

- (1) いわゆる「奈良」を扱うプロジェクト
- (2) そうではない場所やコミュニティを対象にしたプロジェクト

(3) それらを繋げるようなプロジェクト

北澤氏が奈良で展開するプロジェクトは、これら (1) ~ (3) いずれの可能性にも開かれています。

具体的には、十和田市現代美術館で発表した《ロスト・ターミナル》を展開させるアイデアがあります。

《ロスト・ターミナル》は日本では風景や体験に違和を生み出し、それがアートプロジェクトとして成立していますが、たとえインドネシアに同じ作品を持ち込んでも、それは日常風景であり目新しいものとは言えません。奈良でこのプロジェクトを展開させるにあたって北澤氏が目指しているのが、日本でもインドネシアでもプロジェクトになる（違和を生み出す）仕掛けです。そのために北澤氏が着目しているのが「人力車」です。人力車の車輪と梶棒の部分はそのままに（これは現在のインドネシアでは見られない仕様）、座席や雨除けの部分をインドネシアゆかりの造形にする（日本では見られない仕様）ことで、新しいオブジェを制作します。

また、そのようにして出来た新しい人力車を運転するのは、インドネシアからの移住者や留学生を想定しています。そして、それに乗車する鑑賞者が案内されるのは、奈良の観光地ではなく、運転手の生活空間です。鑑賞者は奈良に暮らす異国からの生活者の暮らしぶりを知る機会になり、奈良を再発見していくことになるでしょう。北澤氏が4月に奈良公園周辺を視察した際に感じたのは、異国からの観光客ばかりで（インドネシアの人々も実際多い）、そのような場所で奈良市民を対象にプロジェクトをすることの難しさでした。かといってそのいわゆる奈良らしさを無視してしまうこともプロジェクトにとっては惜しく、このようにインドネシアと日本を、あるいは観光地と生活空間を掛け合わせるアイデアを導きました。

北澤氏の現在の拠点がインドネシアであることから上記のアイデアが生まれていますが、実際には運転手の国籍は東南アジアなどとエリアを広げることが可能で、そのことで、座席や雨除けの部分はその国のゆかりの造形となり、案内される生活圏にも多様性が生まれることが想定されます。

3. 開催日程

次回視察：2019年7月第1週目または第2週目（2泊3日程度）

- ・「新しい人力車」を展示・運営できる拠点場所の候補地を視察
- ・インドネシアや東南アジアからの移住者や交流支援団体との面会
- ・ディレクターおよび文化振興課との打ち合わせ

プロジェクト実施期間：2020年1月（2週間～1ヶ月間程度）

- ・検討事項：運営期間と展示期間を分けるかどうか

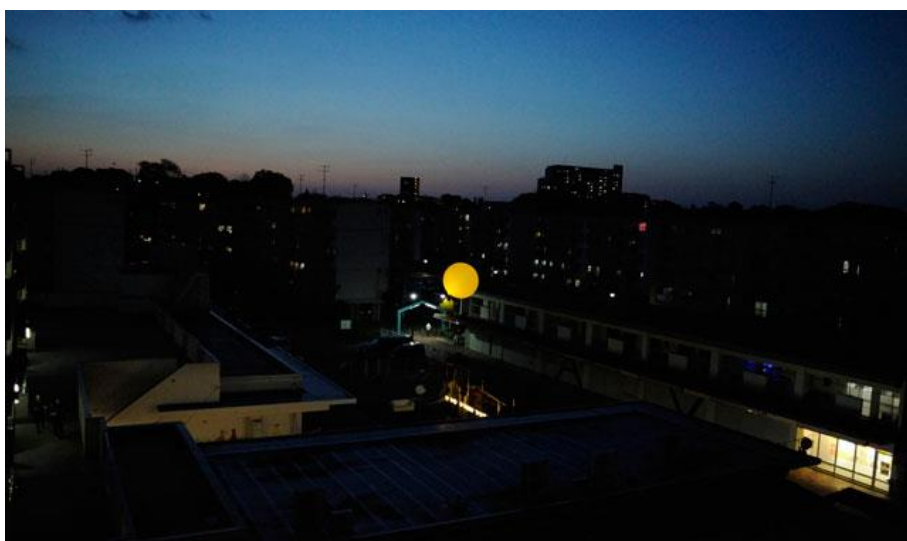
4. 過去作品

① 《リビングルーム》（埼玉県北本市 北本団地／徳島県徳島市両国本町商店街ほか多数、2010年3月～）



商店街の空き店舗にカーペットを敷き、周囲の家を訪ねて不要な生活用品を集めていく。ひとつひとつの品をカーペットの上に配置し、地域のどこにでもある居間のような空間をつくりあげたのち、地域住民が自宅にある生活用品と物々交換できる場所としてひらく。開放された空間に自然と集まった人びとは、空っぽの状態から品が集まるにしたがって日常的な行為（ソファに座る、本を読む、テレビをみる、料理をする等）を獲得していく。物々交換をとおして内装は日々変化しつづけ、それに合わせて「リビングルーム」の活動も予測できない変化をつづける。

② 《サンセルフホテル》（茨城県取手市 井野団地／台湾台北市中正区南機場団、2012年9月～）



地域の空き部屋を手づくりの「客室」に変え、一泊分の電力を地域産の太陽光エネルギーによって賄う、不定期出現型ホテル。「サンセルフホテル」に泊まる宿泊客は「客室」にチェックインしたあと、日中ホテルマンと共に特製の太陽光発電ユニット「ソーラーワゴン」で周囲を散策しながら、地域産の電気を蓄電する。日が暮れた頃、貯まった電気を使って上空に浮かべた「太陽」を光らせ、余りの電力で客室に必

要な電気をまかなう。地域住民の有志を中心としたホテルマンによる多彩なおもてなしを楽しみながら時間は過ぎ、「太陽」の光が消えるころには「客室」の電気も尽きて、就寝を迎える。「サンセルフホテル」は、地域の夜空と空き部屋に宿泊客とホテルマンが一緒になって「太陽」と「ホテル」をつくりあげる体験をとおして、人と人、人と自然の関係性を再構築する習慣となる。

③ 《マイタウンマーケット》（福島県相馬郡新地町 小川公園応急仮設住宅、2011 年）



仮設住宅のなかに「手づくりの町」をつくる行事。2m 四方のカラフルなゴザを編む作業を仮設住宅の集会所ではじめ、その作業に自然とあつまった人びとと共に作りたい町について話し合う。編み上がったゴザを組み合わせた上に、思い思いの「町のパーツ」を簡易的に設え、それらが市場のように立ち並ぶことで「手づくりの町」があらわれる。1 日のイベントとして毎回内容を変えながら定期開催することで、仮設住宅のなかに映画館、図書館、バス停、カフェ、スーパー、役場、美術館、コンサートホール、銭湯、プラネタリウム、テレビ局など多様な「町」の姿がつくられてきた。大きな震災を経験し、ふるさとの再建を余儀なくされた土地のなかで、「マイタウンマーケット」を地域の文化行事として育むことを通して、町について思考し、創造する力を次の世代の生きる技術としてポジティブに伝承していく。

④ 《ロスト・ターミナル》（青森県十和田市、2019 年）



自身の活動拠点であるインドネシアの街なかを走る乗り物を現地の職人たちと新たに制作し、それを十和田市に持ち込み、美術館に訪れた人や市民が実際に乗れる状況を生み出す。かつて日本にもあった移動の光景や十和田の馬産地としての歴史、さらにはインドネシアにおいても変わりゆく路上の風景、2つのかけ離れた土地の「失われた／失われつつある」日常を、時間や空間を超えて実社会に描きなおしていく。個人や団体がこの制作過程に「広告主」として間接的に加わり、国や地域、言語を超えた共同制作を試みる新たなアプローチ。